

琉球大学学術リポジトリ

奄美沖縄方言群における沖永良部方言の位置づけ

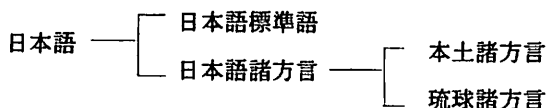
メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2007-11-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 狩俣, 繁久, かりまた, しげひさ, Karimata, Shigehisa メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2379

奄美沖繩方言群における沖永良部方言の位置づけ

かりまたしげひさ

1. 琉球諸方言の方言区画

(1) 台湾と与那国島のあいだをとって東シナ海にながれこんだ日本海流（黒潮）は奄美大島とトカラ列島のあいだをとって、再び太平洋にながれていく。この黒潮によって区切られた地域は、1609年に島津藩によって侵略される以前の琉球王国の版図である。この地域は1879年（明治12年）に日本国にくみこまれるまで独立の国家をなし、日本本土とはべつの歴史をあゆんできたために、本土とはおおきくことなる文化をはぐくんできた。そして、この地域で伝統的にはなされてきた言語は、日本語祖語から分岐した、日本語の変種であることがわかっている。しかし、音韻、語彙、文法の各面にわたって本土の諸方言とおおきくことになっていて、日本語諸方言は本土方言と琉球方言とに二分されるのであるが、そのことは、学界での定説であり、おおくの人々のしるところである。



広い海域に点在する琉球列島の島々で話されている北の端と南の端の方言とでは話がまったく通じないほどおおきくことになっている。奄美大島、沖縄本島などのおおきな島ではその島の内部の方言差もちいさくない。たとえば、沖縄本島の諸方言は、北部方言と中南部方言とのふたつの方言グループにおおきくわけられるし、奄美大島でも北部方言と南部方言とのふたつの下位方言に区分される。しかし、与論方言、沖永良部方言というように、島を単位に下位区分するのは、島には島内部でのひとまとまり性がある、相対的に独立した方言圏をなしているからである。

琉球方言の最小の単位は「シマ」と方言でよばれる村落共同体である。そのシマは政治的にくぎられた単位であるだけでなく、祭祀や婚姻をおこなう単位でもあり、シマの独立性は近年までたもたれていた。イントネーションやいくつかの単語、いいまわしなどにシマごとの微妙なちがいがあって、地元の人々はそのちがいにとても敏感である。人々はそのシマ出身の両親のもとに生まれ、そのシマにそだち、そのシマ出身の配偶者をもとめた。そんな時代に、シマは方言の最小の単位でもあった。

(2) 言語学上の共通の特徴をもつ、ふたつ以上、ときにはよっつ、あるいは、いつつ以上のシマで形成される小グループがある。これらの小グループがあつまって、もうすこしおおきな方言グループが形成される。さらにこの方言グループがいくつかあつまって、おおきな方言群が形成される。音韻、文法、語彙などの言語的な特徴の異同によって方言を区分したものを方言区画という。その境界線は、海や山、川などの地理的な条件によってひかれることもあり、また、ふるい時代の政治的な区分、あるいは、社会的な条件によってひかれることもある。かつて間切とよばれる現在の市町村に相当する琉球王国時代の政治的区分があったが、琉球方言のばあい、とくに奄美、沖縄諸島の方言のばあいこの間切の境界線が方言グループの境界線になることがすくなくない。

(3) 琉球列島の諸方言は、奄美諸島、沖縄諸島ではなされている奄美沖縄方言群（北琉球方言ともよばれる）と宮古諸島、八重山諸島ではなされている宮古八重山方言群（南琉球方言あるいは先島方言ともよばれる）のふたつの方言群におおきくわかれていた。このふたつの方言群は、300キロメートル弱の島のない海域によってへだてられている。ふたつの方言群のあいだのちがいは、音韻論的にも、文法論的にも、語彙論的にも顕著にみられ、方言での意志の疎通がまったくはかれないほどである。

この海域は、島のまったくない距離としては、カムチャツカ、千島列島、日本列島から琉球列島をへて、台湾、パシー海峡、フィリピン諸島、そしてスラヴェシ島、ニューギニアとつづく、ユーラシア大陸の東側、西太平洋に列状に

つらなる、いくつもの島々のなかで最長である。この海域は渡り鳥をのぞく鳥たちにとってもこえがたいものであったようで、鳥類を旧北区と東洋区に区分する動物区分線（蜂須賀線）がこの海域をよこぎっている。そして、そのことと関連して、この両地域は、10世紀になってはじめて共通の文化圏が形成されるようになるが、縄文文化や弥生文化の遺跡が宮古、八重山の諸島から発見されておらず、考古学的にみても大きな断絶がある。古代人たちにとってもこの海域をこえるのは困難だったのだろう。

琉球諸方言を奄美沖繩方言群と宮古八重山方言群のふたつに区分するのに、現在のところおおかたの異論はないようである。問題はふたつの方言群の下位区分である。宮古八重山方言群でも下位区分のしかたに諸説あって、課題がのこっているが、今回は、奄美沖繩方言群の下位区分について、とくに、沖永良部方言をいかに位置づけるかについてかんがえる。

注) かつては、琉球諸方言を奄美・沖繩・宮古・八重山のよっつに区分する説（仲宗根政善「琉球方言概説」1961）や、奄美・沖繩・宮古・八重山・与那国のいっつに区分する説（平山輝男『琉球与那国方言の研究』1964）、奄美沖繩・先島・与那国のみっつに区分する説（外間守善『日本語の世界9』1981）などもあったが、このごろは、まず、南北ふたつの方言群に区分する説が有力である。

仲宗根政善1961の区分図は4区分説であるが、おなじ論考で「琉球方言におけるもっとも明確な境界は、沖繩本島と宮古島の間にある。琉球方言を南北琉球方言に大別して、北琉球方言を奄美大島方言と沖繩方言に分け、南琉球方言を宮古方言と八重山方言に分けることもできよう。」と記述していて、北琉球方言と南琉球方言のあいだに「もっとも明確な境界」を設定していて、2区分説的な考えもしめしている。

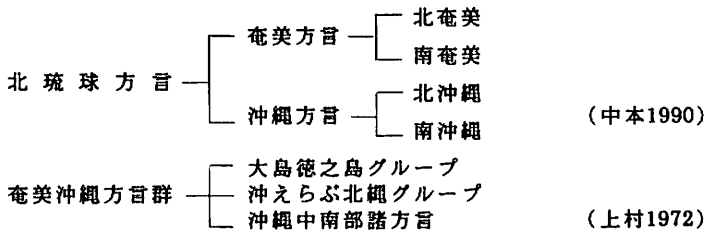
2. 奄美沖繩方言群の下位区分

(4) 奄美沖繩方言群をさらに下位区分するのに、2区分説と3区分説がある。研究史的にみると、2区分説を支持する研究者がおおく、3区分説は数のうえ

ではすくない。中本正智1990『日本列島言語史の研究』が代表的な2区分説であり、上村幸雄1972「琉球方言入門」が3区分説の代表である。中本1990では与論島と沖縄本島の上に境界線をひき、奄美沖縄方言群を奄美方言と沖縄方言のふたつに区分している。仲宗根1961も与論島と沖縄本島とのあいだに境界線をひき、北琉球方言にかぎっていえば2区分説とみることができる。平山1964も同様である。上村1972は、つぎのようにのべて3区分説をとっている。

琉球方言はたくさんの下位方言からなりたっているが、これらはおおきくまず、奄美沖縄方言群と先島方言群のふたつに分かれるものとみられる。奄美沖縄方言群のなかは、だいたいおおきな島ごとに方言がちがっているが、なかでも大島と徳之島の方言は比較的にているし、また、沖えらぶから沖縄北部までの方言がまた比較的によくにている。

そして、「琉球方言の下位区分」としてかけた地図のなかで、「大島徳之島グループ」「沖えらぶ北沖縄グループ」をとりだしている。(沖縄中南部の諸方言の位置づけは明確ではない。)



中本1990『日本列島言語史の研究』では奄美方言と沖縄方言のそれぞれの特徴をつぎのように示している。

<奄美方言>

- (1) イ段とエ段の母音がそれぞれ i と i で区別され、派生母音 e :、o : も多い。
- (4) 活用語の終止形が、ム系のほかに、リ系をもつ。

<沖縄方言>

(1) イ段とエ段の母音が区別を失って i となり、派生母音 e :、o : も多い。

(4) 活用語の終止形が、宮古、八重山とともに、ム系だけである。

※ ((2)(3)は奄美方言と沖縄方言を区分するものではないので省略した。)

中本1990は、母音体系のちがいと活用語（動詞と形容詞）の終止形語尾のちがいを分類の基準としている。

上村1992でも3区分説を明確に提唱しているわけではないが、上村1972を継承しつつ、つぎのようにのべている。

2、3、4、すなわち、奄美大島とその属島（加計呂麻島、および諸島と与路島）と徳之島の諸方言は、2個の中舌の母音音素（/ i, e /）を有するという、ほぼ共通の母音音素の体系をもち、また、ほぼ共通の子音音素の体系をもっているため、ひとつのおおきな方言圏と見なすこともできる。他方、5、6、7、すなわち、沖永良部島、与論島、沖縄北部の3者は、中舌的な母音音素をもたず、かつ、子音音素の特徴（特に、カ行の子音の [k] から [h] への移行、ハ行の子音の唇音性の保持という共通性）に基づいて、ゆるやかな共通性をもったひとつの地域と見なすことができる。そして、この共通性は、沖縄の古い北山の支配地域であったことと関係して生まれた可能性がある。また、1の喜界島方言は、その音韻の特徴を、この沖永良部、与論、沖縄北部グループと共通させている。

8の沖縄中南部方言は、中舌的な母音音素をもたない点では、沖永良部、与論、沖縄北部グループと共通するが、カ行子音を [h] に変えず、行子音に原則として [p] を保たない点で、このグループと音韻の特徴を大きく異にする。

以上はつぎのように整理できる。

(1) 奄美徳之島諸方言が2種類の中舌母音 / i, e / を含む7母音組織なのに対して、沖永良部与論沖縄北部諸方言と沖縄中南部諸方言は、標準語と同じ5母音組織である。

- (2) 沖永良部与論沖繩北部諸方言は、標準語の／ka, ke, ko／の子音／k／に対応して／h／があらわれる。
- (3) 沖永良部与論沖繩北部諸方言は標準語のハ行の子音／h／に対応して／p／もしくは／Φ／であらわれ、唇音性を保持しているが、奄美徳之島諸方言、沖繩中南部諸方言のいずれも唇音性をうしなっている。
- (4) 沖繩中南部諸方言は上記の(1)(2)(3)のいずれの特徴ももたない。

2区分説と3区分説とでは、沖永良部方言と与論方言をどう位置づけるかによってことになっている。それぞれの説のよってたつ根拠があって、解決するのは困難なようにもみえるが、ひとつひとつ検討していくことにする。

3. 活用語の終止形語尾について

- (5) まず、2区分説をとる中本1990の提示した特徴から検討する。中本1990によると、奄美方言には動詞の終止形にリ系の／kakjuri／とム系の／kakjun／のふたつの形があるのに対して、沖繩方言にはム系／kacjun／のひとつの形しかなく、それを2区分説の指標にしている。

【表1】

	動詞終止形	
	リ形	ム形
奄美方言	kakjuri	kakjun
沖繩方言	————	kacjun

動詞のばあいと同様に、形容詞の語尾にもリ系とム系があって、やはり、奄美方言と沖繩方言を区分する指標になっている。

【表2】

	形容詞終止形	
	リ形	ム形
奄美方言	takasari	takasan
沖繩方言	————	takasan

3 区分説を提示する上村幸雄1992でも文法的な特徴についてはつぎのようにのべている。

1 から 6 (奄美大島から与論島) にいたる奄美諸島地域の方言は、この地域が 17 世紀初頭以来、薩摩の直接支配を受けるひとまとまりの地域となり、今日も、行政的に鹿児島県に属するように、沖縄諸島との関係が疎遠になったことを反映して、この地方に対する薩摩方言の影響の程度がやや濃いことも含め、文法などに、若干の共通性を発見することができる。同様に、7、8 (沖縄北部、沖縄中南部) の沖縄諸島の諸方言は、その南北間での際立った対立にもかかわらず、琉球王国成立後、ひきつづいて、長期間、首里王府の支配下にあったために、やはり、文法などの点で、若干の共通性をもつ。こうして、北グループは、17 世紀の以降のこの地域の歴史を反映して、奄美グループと沖縄グループのような下位区分をすることもできる。

上村1992の「文法などに」見られる「若干の共通性」も中本1990でいうところの動詞や形容詞の終止形の語尾の2系の分布状況であろうか。はたして、活用語の終止形語尾によって奄美方言と沖縄方言に二分できるだろうか。奄美沖縄方言群のおおきな島の代表的な方言の動詞終止形の語尾のあらわれかたについてみてみよう。

【表3】

	動詞の終止形	
	リ系	ム系
名瀬方言	k a k j u r i	k a k j u N
諸鈍方言	k a k j u r	k a k j u m
喜界方言	h a k j u i	h a k j u N
和泊方言	————	h a t j u m u
知名方言	————	h a k j u m u
与論方言	h a k j u i	h a k j u N
今帰仁方言	————	h a t j u N
首里方言	————	k a t j u N

注) 沖永良部方言では、/hatfumu/、/hakjumu/の形とともに/hatjun/、
/hakjun/の形も併用されているようである。この形は、/hakjumu/から
変化したものだとかんがえられていて、沖縄方言とおなじ形である。

リ系とム系のふたつの形が併存している方言の南限は与論方言で、沖縄本島
と与論島のあいだに境界線があるようにみえるが、うへの【表3】にみるよう
に沖永良部方言にリ系はみられず、沖縄北部方言、沖縄中南部方言と同様にム
系しか存在しない。形容詞の語尾についても同様である。

動詞、形容詞の終止形語尾のちがいによって奄美方言と沖縄方言のふたつに
区分しようとする、と、与論方言を奄美方言に区分し、沖永良部方言を沖縄方言
に区分しなければならない。沖永良部方言が分断され、その位置づけに問題が
のこることになる。動詞、形容詞の語尾におけるリ系とム系の分布状況によっ
て、奄美方言と沖縄方言のふたつに明確に区分することはできないのではない
だろうか。

注) 奄美沖縄方言群の動詞の「終止形」(いいおわりの述語に使用される動詞の完成
相・現在未来・直説法・断定という、アスペクト・テンス・ムードの文法的な意
味をあらわす形)は、動詞の連用形(連用形の第一なかどめ)の形に「居る」に
相当する形が接続し、それが融合した形である。リ系は「居り」に対応するが、
ム系は、加計呂麻島の諸鈍方言などの終止形[kakjum]や一般たずねの形(疑問
詞なしの疑問文の述語の形)[katfumi]などから、「居り」にさらに「ム、あ
るいは「モ」のような、[m]を含む接尾辞が接続したものが連用形に接続して
いると推定されている。

注) 奄美沖縄方言群のほとんどの方言の形容詞は「形容詞語幹+サ+有り」という
語構成からなりたっているようである。

注) リ系の終止形は、現在の沖縄方言にみられないが、おもろさうし、琉歌や組踊、
沖縄芝居の台詞(特に明治大正期に創作されたもの)などの古典琉球語にもみら
れるもので、かつて、沖縄の方言でも使用されていたことはあきらかである。お
そらく、沖永良部島の方言にもかつては存在していたものとおもわれる。

- 一 勝連まみにやこは やでおちへ
 又 中百名こみなこは やでおちへ
 又 昼 なれば、肝 通い 通て、
 又 夜 なれば、夢 通い 通て、
 又 西道の 謝名道る 行きゃしゅ。
 又 東道の 屋宜道る 行きゃしゅ。
 又 東道い 屋宜のおもいぎゃ 待ち居り。〔屋宜思いが待っている。〕
 又 西道や 謝名おもいぎゃ 待ち居り。〔謝名思いが待っている。〕
 又 いぢや 屋慶名 中道ぢよ 行きゃしよ。〔『おもろさうし』巻十四の十五〕

伊集の 木の 花ぬ 〔伊集の木の花が〕
 あん 清らさ 咲ちゅい。〔あんなにきれいに咲いている。〕
 吾も 伊集の ごと 〔わたしも伊集のように〕
 真白 咲かな。 〔真っ白に咲きたいものだ。〕『琉歌全集』

ただし、オモロや琉歌、組踊のぼあいには、明らかな進行・継続の意味をあらわしている。これはこの終止形が「動詞連用形+居り」からなりたっていることに由来している。この進行の意味は首里方言などでは近年までのこっていたが、現在ではうしなわれていているようである。

4. 母音体系について

(6) それでは、中本1990の2区分説、および、上村1992の3区分説の根拠である母音体系についてみてみよう。両者は母音体系のちがいを下位区分する際の指標にしている、この点では衝突している。

そもそも両者のいう母音体系のちがいはどのようなものだろう。

琉球諸方言と本土諸方言のあいだの最もおおきなちがいは、「せま母音化」とよばれる母音の変化で、琉球諸方言全体で奥舌の半せま母音/o/の奥舌せま母音/u/への変化がおこっているし、前舌の半せま母音/e/の前舌せま母音/i/への変化もおこっている。

ただし、奄美沖繩方言群と宮古八重山方言群とでは、標準語の前舌半せま母音 /e/、および前舌せま母音 /i/ に対応する母音のあらわれ方にちがいがみられ、それが両者をわける指標になっている。奄美沖繩方言群では前舌の半ひろ母音 /e/ が中舌せま母音 /i/ に変化し、さらに、沖繩諸島方言や沖永良部島、与論島の方言ではそれが前舌せま母音 /i/ に変化して、従来の前舌せま母音 /i/ と統合している。それに対して、宮古八重山方言群では前舌半せま母音 /e/ が中舌せま母音 /i/ に変化することなく、前舌せま母音 /i/ に変化している。また、前舌せま母音 /i/ が宮古諸方言では舌先母音 /ɿ/ に変化している。また、八重山諸方言でも舌先母音 /ɿ/ に変化しているが、方言によってはさらに前舌せま母音 /i/ に変化している。

奄美沖繩方言群

*o → u
*e → i → i
*i → i

宮古八重山方言群

*o → u
*e → i
*i → ɿ (→ i)

中本1990は、前舌の半せま母音 /e/ に対応して中舌母音 /i/ があらわれるのが奄美方言であり、せま母音 /i/ があらわれるのが沖繩方言であると主張し、上村1992は、中舌母音 /i/ があらわれるのは奄美徳之島方言グループであり、沖永良部島以南の島ではせま母音 /i/ があらわれると主張していて、おなじ現象をめぐる両者はおおきく対立することになる。

それでは、この標準語の工段の音節の母音 /e/ に対応してあらわれる中舌母音 /i/ の分布をみてみよう。

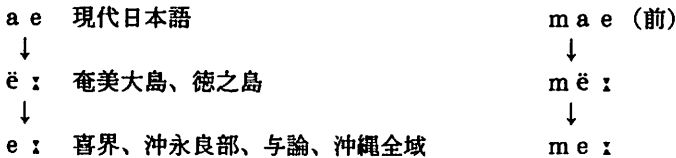
【表4】

	目	毛	前
名瀬市伊津部	m i	k' i	m e
瀬戸内町諸鈍	m i :	k' i :	m e :
徳之島町伊之川	m i :	k' i :	m e :
伊仙町犬田布	m i :	k' i :	m e :
喜界町中里	m i :	k' i :	m e :
和泊町国頭	m i :	k' i :	m e :
知名町久志検	m i :	k i :	m e :
与論町城	m i :	k i :	m e :
今帰仁村謝名	m i :	k' i :	m e :
那覇市首里当蔵	m i :	k i :	m e :

うえの表であきらかなように、奄美方言全体に / i / がみられるわけではなく、沖永良部島、与論島、そして喜界島（北端の小野津、志戸桶、佐手久のみ一つの集落をのぞく）で / i / に変化していて、その点は沖縄方言とおなじである。

また、標準語の二重母音 / a i // a e / に対して、奄美大島、徳之島の諸方言では中舌の半ひろ母音 / ë : / があらわれるが、沖永良部、与論、喜界（北端の小野津、志戸桶、佐手久のみ一つの集落をのぞく）、沖縄北部、沖縄中南部の諸方言では前舌の半ひろ母音 / e : / があらわれる。

奄美沖縄方言群



【表4】にみるように母音体系のちがいによって奄美方言と沖縄方言に2分することはできない。中本1990もその点には気がついていて、母音体系のちがいを指標に奄美方言を「北奄美方言」と「南奄美方言」に下位区分している。奄美大島と徳之島の諸方言を北奄美方言に、沖永良部島、与論島、喜界島（小野津、志戸桶、佐手久をのぞく）の諸方言を南奄美方言に属させている。

奄美大島と徳之島が北奄美方言だとすれば、沖永良部島と与論島とは南奄美方言と呼ぶことができる。このように北と南をわける特徴は、中舌母音にある。北奄美では中舌母音 i がさかんに用いられ、南奄美ではそれが衰退している。

沖永良部島、与論島、喜界島の諸方言に中舌母音 / i / がみられないとすれば、この母音体系のちがいを指標にして奄美方言と沖縄方言のふたつに区分することはできない。母音体系の観点からみると、沖永良部島と徳之島のあいだにふとい境界線をひかなければならず、沖永良部島から沖縄本島までが連続した地域であるとみなさなければならないだろう。

注) 喜界島北端の小野津、志戸桶、佐手久のみつつの集落には、この2種類の中舌母音 [i] [ë] がある。

m i : (目)、h o : b i (頭)、h a s s a g i (髪の毛)、
n u b i (喉)、p i : (尻)、
m ë : (前)、p ë : (蠅)

そのため、中本正智1984「琉球方言の区画」では小野津、志戸桶、佐手久の方言は北奄美方言に区分され、のこりの集落は南奄美方言に区分されている。

奄美方言 { 北奄美方言 … 奄美大島北部・奄美大島南部・喜界島北部
南奄美方言 … 喜界島南部・沖永良部島・与論島

たしかに、母音体系のちがいを重視して、小野津、志戸桶、佐手久のみつつの集落の方言を北奄美方言のグループに入れることもかんがえられる。しかし、このみつつの集落が奄美大島からの移住集落でなく、伝統的な喜界島の集落であるとするならば、以下にのべるような、/p/音の保存、/k/の/h/への変化、軟口蓋の鼻音 [ŋ] (音節をひらく子音として機能する) がみとめられるなど、子音体系のうへでは他の喜界島方言と共通である。

p a n a (鼻)、p j a : (足)、p u n i (骨)、p o : k i (簪)
h a m a (鎌)、h i : (毛)、h u m i (米)

母音体系のちがいも方言を区分するうえでの重要な指標であるが、子音体系もまた重要な指標である。方言を区画するときには、単にあるひとつの指標によっておこなうのではなく、総合的に判断しなければならないだろう。本稿では喜界島方言の位置づけ、とくに小野津、志戸桶、佐手久の3集落の方言の位置づけについて詳述するのが目的ではないので、別の機会にゆずりたいが、とりあえず、他の喜界島方言と一緒に区分しておくことにする。

また、沖永良部島の和泊町国頭の方言には [sɪ] [tsɪ] [dʒɪ] のような発音があって、[ʃi] [tʃi] [dʒi] との区別を保持している。この [sɪ] [tsɪ] [dʒɪ] は、奄大島、徳之島の [sɪ̥] [tsɪ̥] [dʒɪ̥] にみられる中舌せま母音の痕跡であろう。

s i n i : (脛)、s i d z a (年上)、ʔ a s i : (汗)
 t s i n u : (角)、t s i m i : (爪)、m a t s i (松)
 m i d z i : (水)

国立国語研究所1964『沖縄語辞典』によると、かつては首里士族の男子の発音にもこれと似た [si] [tsi] [dzi] があって、[ʃi] [tʃi] [dʒi] と対立していたようである。これも中舌母音の痕跡であろう。しかし、この対立は現在ではまったく失われて、それぞれ [ʃi] [tʃi] [dʒi] に統一している。

5. カ行音節の子音について

(7) つぎに上村1992のいう子音体系のちがいについて検討してみる。まず、カ行子音 /k/ の摩擦音化についてみてみよう。次の表6、7にみるように語頭にあらわれる標準語のカ行子音 /k/ は、奄美大島、徳之島の諸方言では標準語のキ、クの子音 /k/ に対応して喉頭音化した /k'/ があらわれ、カ、ケ、コの子音 /k/ に対応して喉頭音化しない /k/ があらわれて、両者は音韻論的に対立している。それに対して、沖永良部、与論、喜界、沖縄北部のおおくの方言でカ、ケ、コの子音 /k/ が /h/ に変化し、キ、クの子音 /k/ は破裂音(あるいは破擦音に変化) としてとどまっていた、/h/ に変化することはない。ただし、沖縄北部諸方言のなかには、恩納村恩納や名護市久志のように、まったく摩擦音化しない方言もふくまれている(摩擦音化しない方言では奄美徳之島諸方言のように喉頭/非喉頭の対立がみられる)。沖縄中南部諸方言では、奄美大島、徳之島の諸方言にみられる破裂音、破擦音の喉頭音化/非喉頭音化という対立もないし、/k/ の摩擦音化もみられない。

【表5】

	川 (井戸)	米	雲
名瀬市伊津部	k'o	k'um i	k'u ɾ mu
瀬戸内町諸鈍	↓ k'o :	k'u ↓ m i :	k'u ↓ m u :
徳之島町井之川	↓ k'o :	k'u ↓ m i :	k'u ↓ m u :
伊仙町犬田布	↓ k'o :	k'u ↓ m i :	k'u ↓ m u :

喜界町志戸桶	∨ h o :	h u 「 m i	k' u 「 m u
喜界町中里	∨ h o :	h u 「 m i	k' u 「 m u
和泊町国頭	∨ h o :	h u ∨ m i :	k' u ∨ m u :
知名町久志検	∨ h o :	h u ∨ m i :	k' u ∨ m u :
与論町城	† h o :	m a ʔ i	k u 「 m u
国頭村辺野喜	h a 「 :	h u 「 m i	k' u 「 m u
大宜味村大宜味	h a 「 :	h u 「 m i	k u 「 m u
今婦仁村与那嶺	「 h a :	h u m i 「 :	k' u m u 「 :
名護市久志	k' a 「 :	k' u m i 「 :	k' u m u 「 :
恩納村恩納	k' a 「 :	k' u m i	k' u m u
石川市伊波	k a :	k u m i	k u m u
那覇市首里当蔵	k a :	k u m i	k u m u

【表6】

	毛	肝
名瀬市伊津部	k' i	k' i 「 m u
瀬戸内町諸鈍	∨ k' i :	k' i ∨ m u :
徳之島町井之川	∨ k' i :	k' i ∨ m u :
伊仙町犬田布	∨ k' i :	k' i ∨ m u :
喜界町志戸桶	h i ʔ :	k' i 「 m u
喜界町中里	h i ʔ :	tʃ i 「 m u
和泊町国頭	∨ h w i 「 :	tʃ i ∨ m u :
知名町久志検	∨ h i :	k' i ∨ m u :
与論町城	h i ʔ :	k i ʔ m u
国頭村辺野喜	h i 「 :	k i 「 m u
大宜味村大宜味	h i 「 :	k i 「 m u
今婦仁村与那嶺	k' i 「 :	tʒ i m u 「 :
名護市久志	「 k' i :	k' i ∨ m u :
恩納村恩納	「 k' i :	† tʒ i m u
石川市伊波	k i :	tʃ i m u
那覇市首里当蔵	k i :	tʃ i m u

カ行子音の各音節でのあらわれ方を表にまとめると、以下のとおりになる。

【表 7】

	カ	コ	ケ	ク	キ
名瀬市伊津部		k'			k'
瀬戸内町諸鈍		k'			k'
徳之島町井之川		k'			k'
伊仙町犬田布		k'			k'
喜界町志戸桶		h			k'
喜界町中里		h		k'	tʃ
和泊町国頭		h		k'	tʃ
和泊町和泊		h		k'	tʃ
知名町久志検		h			k'
与論町城		h			k
国頭村辺野喜		h			k
大宜味村大宜味		h			k
今帰仁村与那嶺	h		k'	k'	tʃ
名護市久志		k'			k'
恩納村恩納		k'			k'
石川市伊波		k			tʃ
那覇市首里		k			tʃ

語頭での /k/ → /h/ の変化についてみると、沖永良部島と徳之島（および奄美大島と喜界島）のあいだに明確な境界線をひくことができる。しかし、今帰仁村与那嶺、名護市久志、恩納村恩納などの沖縄北部では、/k/ の /h/ への変化がみられず、沖縄中南部方言とのあいだに明確な境界線をひくことがむづかしい。

(8) 語中の /k/ がひろ母音 /a/、半ひろ母音 /e/ / /o/ にはさまれるとき、摩擦音化して /h/ になり、方言によってはその /h/ まだが脱落して消失してしまうことがあるが、この現象は喜界島、沖永良部島、与論島の諸方言だけでなく、奄美大島、加計呂麻島、徳之島の諸方言でもみられる。沖縄北部方言や沖縄中南部方言ではあまりみられない傾向があって、そのことによって、奄美方言と沖縄方言とに区分できそうである。

【表8】

	桶	竹
名瀬市伊津部	w ě :	d ě :
瀬戸内町諸鈍	w i̇ ᵛ h ě :	d i̇ ᵛ h ě :
徳之島町井之川	ᵛ w i̇ :	ᵛ d ě :
伊仙町犬田布	ᵛ w i̇ :	ᵛ d ě :
喜界町志戸桶	ᵛ w i̇ :	ᵛ d e :
喜界町中里	ᵛ w i :	d e ʔ :
和泊町国頭	ᵛ w u i	t d e :
知名町久志検	ᵛ w u i	t d e :
与論町城	t w u i	t d a i
国頭村辺野喜	u : ʔ k i	r a ʔ h i
大宜味村大宜味	u : ʔ k i	d a ʔ k i
今帰仁村与那嶺	h u ᵛ k i	d a ʔ k i :
名護市久志	u : ʔ k i	d a ʔ k i

しかし、沖縄方言においても語中における /k/ → /h/ の変化がまったくないわけではない。たとえば、今帰仁方言でも語中の /k/ の /h/ への変化が観察できる。しかし、単語に制限があって、すべてのばあいに /h/ に変化するわけではないし、奄美方言にみられる前後の母音の同化現象もみられないし、語中の /h/ がさらに脱落することも非常に稀である。語中の母音間の /k/ の /h/ の変化を指標にして、奄美沖縄方言群を奄美方言と沖縄方言に明確に2区分することはむずかしい。

w a h a : ʔ r u ᵛ N (分かる)、w a h a : ʔ j e ᵛ N (若い)、
 m u ᵛ h u (婿)、t ' a h u ʔ : (娟)、n a ᵛ h a : (仲)、
 m a h a ʔ i (碗・マカリ)、t ' a : ʔ j e ᵛ N (高い)

(用例は『今帰仁方言辞典』今帰仁村与那嶺)

(最後の例は摩擦音がさらに脱落する稀な例である。)

s a ʔ h u (娟)、ʔ n a h a (中)、Φ a r a ʔ h a (裸)、
 ʔ Φ a h u (箱)、ʔ s u h a (十日) (国頭村辺野喜)

注) 沖永良部方言には、つぎのような語中の /k/ の摩擦音化、脱落の現象がある。

桶 *woke > wuhe > wuhi > wui (> wi: > wi:)

竹 *dake > dahe > dahi > dai > dē: > de:

十日 *toka > toha > tuha > tuwa > twa:

語中での h 音の脱落現象は、つぎのような興味深い変化をもたらしている。地名「平川」の方言形は [hjo:] だが、これは [*hirakawa] から変化してできた形である。

平川 *hirakawa > hjo:

/hira/ の前半部分と、/kawa/ の後半部分にわけてかんがえる。沖永良部方言では「坂」が /hja:/、
「虱」が /ʃa:ni/ となっていて、それと同様に /hira/ は /hja:/ となるだろう。また、「縄」が /no:/、
「粟」が /o:/ となっていて、/kawa/ は /ko:/ となる。そして、前半部分末尾のひろ母音 /a/ と後半部分の半ひろ母音 /o/ にはさまれた /k/ が /h/ に変化したのちに、さらに脱落する。そして、前後の母音が融合する。これは「蛸」が /to:/ になるのと同じ現象である。

坂 *hira > hirja > hijja > hja:

皮 *kawa > ko:

蛸 *tako > taho > toho > to:

*hirakawa > hjaako > hjako > hjaho > hjo ho > hjo:

「瀬利覚」が [dzikkjo] となるのも、おなじ原理がはたらいっている。沖縄の「勢理客」[dzitʃaku] 等との比較から [*zerikako] が古形でなかったかと推定される。

*zerikako > zerikjako > zirikjaho >

zirikjoho > zirkjo > zikkjo

この変化がさらにすすむと、与論の「立長」[rittʃo:] につながる。「立長」は「瀬利覚」「勢理客」と同じ語源の地名である。

「瀬利覚」の漢字のあて方は本来の発音にちかいもので、「立長」の漢字のあて方は発音が変化したあとのものだとおもわれる。「平川」も発音が変化する以前にあてた本来の表記なのであろう。

6. ハ行音節の子音 p について

(9) 標準語のハ行子音 /h/ が日本祖語で /p/ であり、それが /p → Φ → h/ と変化して現在にいたっていること、そして、沖縄北部方言や与論方言がその /p/ 音をよく保存していることが知られている。この /p/ は両唇破裂音で、/Φ/ は両唇摩擦音で、ともに両唇を調音点にする子音であって、上村 1992 によると、沖永良部与論沖縄北部諸方言はハ行子音に両唇性をよく保存するという共通点がある。ただし、その唇音性の保存状況は結合する母音の種類によって異なっており、ア段、エ段、オ段で摩擦音化がより進行し、イ段、ウ段では唇音性が保持される傾向にあるようである。

【表9】	葉	骨	船
名瀬市伊津部	ˆ h a :	Φ u ɾ n i	Φ u ɾ n i
瀬戸内町諸鈍	˘ h a :	Φ u ˘ n i :	Φ u ˘ n i :
徳之島町井之川	˘ h a :	Φ u ˘ n i :	Φ u ˘ n i :
伊仙町犬田布	˘ h a :	Φ u ˘ n i :	Φ u ˘ n i :
喜界町志戸桶	ˆ p a :	Φ u ɾ n ɪ	Φ u ɾ n ɪ
喜界町中里	˘ Φ a :	Φ u ɿ n i	Φ u ɿ n i
和泊町国頭	ɿ Φ a :	Φ u ɿ n i	h i ɿ n i
知名町久志検	ɿ Φ a :	Φ u ɿ n i	h i ɿ n i
与論町城	ɿ p a :	p u ɿ n i	ɿ p u n i
国頭村辺野喜	ɿ Φ a :	ɿ Φ u ɿ n i	h i ɿ N
大宜味村大宜味	ɿ Φ a :	Φ u ɿ n i	h i n n i
今帰仁村与那嶺	ɿ p ' a :	p ' u ɿ n i	p ' u ɿ n i
名護市久志	ɿ Φ a :	Φ u n i ɿ :	p ' u n i ɿ :
恩納村恩納	p ' a :	p ' u n i	p ' u n i
石川市伊波	h a :	h u n i	h u n i
那覇市首里当蔵	h a :	h u n i	h u n i

【表10】

	屁	左
名瀬市伊津部	↘hw i :	h i d ʒ a r i
瀬戸内町諸鈍	↘hw i :	h i ↘d ʒ a r
徳之島町井之川	↘hw i :	h i ↘d ʒ a r i
伊仙町犬田布	↘hw i :	h i ↘d ʒ a r i
喜界町志戸桶	p' i ʔ :	p' i ʔ d a ʔ r i
喜界町中里	h i ʔ :	Φ i ʔ d a ʔ r i
和泊町国頭	h w i ʔ :	h w i : ↘d ʒ a i
知名町久志検	h i ʔ :	h i ↘g e :
与論町城	p i ʔ :	p i ʔ d ʒ a i
国頭村辺野喜	ʔΦ i ʔ :	ʔΦ i g a ʔ i
大宜味村大宜味	p' i ʔ :	p' i ʔ d ʒ a i
今帰仁村与那嶺	p' i ʔ :	p' i d ʒ e ʔ i
名護市久志	Φ i ʔ :	p' i d ʒ a ʔ i
恩納村恩納	p' i ʔ :	p' i d ʒ a ʔ i
石川市伊波	h i :	h i d ʒ a i
那覇市首里当蔵	h i :	h i d ʒ a i

注) 奄美大島や徳之島の諸方言の「フ」「ホ」に対応する〔Φu〕の〔Φ〕は後続する円唇の奥舌せま母音〔u〕の影響によるものであって、音韻論的には/hu/とみなすべきものであろう。

注) 国頭村辺野喜方言にみられる〔ʔΦ〕は、非常によわい閉鎖が語頭において観察されるもので、〔p〕から〔Φ〕への摩擦音化の途中にあるものである。〔ʔΦ〕～〔Φ〕とゆれており、音韻論的には/hw/と解すべきものであろう。

この古代日本語の/p/音につながるハ行子音の唇音性の保存状況は、島ごと、集落ごとに一定ではない。恩納村恩納の方言がもっとも保守的な方言で、破裂音/p/をよく保存している。また、大宜味村の塩屋湾以北の地域は、破裂音/p/の摩擦音化が進行している方言がおおく、/p/を保存している方

言にあっても破裂が非常によわく、よく観察していないと摩擦音/Φ/とまちがえてしまうほどである。その中でも国頭村字嘉、辺野喜の方言は、/p/が摩擦音化しているし、前述の/k/も摩擦音化しているが、それだけでなく、タ行子音の/t/も摩擦音/s/に変化して(ただし、語頭のタ、テ、トに限定)、もっとも摩擦音化した方言である。

大宜味村塩屋から沖永良部島にかけての地域の方言では、破裂音、摩擦音が喉頭化/非喉頭化の対立をまったくうしなうか、痕跡的にのこしている方言がおおく、名護市(旧名護町、旧久志村、旧羽地村)、今帰仁村を中心にした地域で喉頭音化した子音を発達させているのと対照的である。

沖永良部方言全体で/p/の/Φ/への変化が完了し、/Φ/から/h/への変化の途中にある。奄美大島、徳之島の諸方言では、/Φ/から/h/への変化がほぼ完了していて、徳之島と沖永良部島とのあいだに境界線をひくことが可能であろう。上の表にはあげていないが、沖縄中南部方言にも/Φ/から/h/への変化の途中にある方言がおおく、この特徴によって沖縄北部方言と沖縄中南部方言を明確に区分することはむづかしい。

ハ行子音の唇音性の保持という点では奄美大島、徳之島が共通の特徴をもち、沖永良部島以南の地域とのあいだに明確な境界線をひくことができる。また、沖縄本島北部と中南部のあいだにもそれほど明確ではないが境界線をひくことができる。

【表11】

	ハ	ヘ	ホ	フ	ヒ
名瀬市伊津部	h				
瀬戸内町諸鈍	h				
徳之島町井之川	h				
伊仙町犬田布	h				
喜界町志戸桶	p'		Φ		p'
喜界町中里	Φ	h	Φ		
和泊町国頭	Φ				
知名町久志検	Φ	h	Φ		h
与論町城	p				

国頭村辺野喜	Φ			
大宜味村大宜味	Φ	p'	Φ	p'
今帰仁村与那嶺	p'		p'	p'
名護市久志	Φ		p'	
恩納村恩納	p'		p'	
石川市伊波	h			
那覇市首里	h	Φ	h	Φ

注) 沖縄中南部諸方言のなかにも八行子音に〔Φ〕を残存させている方言がないことはないが、全体の傾向としては八行子音の唇音性を退化させている。

h w a a (葉)、h w e e (蠅)、h w i c e e (ひたい)

h a a (歯)、h a m a (浜)、h o o c a a (包丁)

(用例は『沖縄語辞典』から)

注) 方言区画のための指標として /k/ の /h/ への変化と、八行子音の唇音性の保持 (/p/ の /h/ への変化ともみなせる) とを比較すると、k の摩擦音化の方が明確である。p の摩擦音化は、すなわち、p > Φ > h の変化には、途中に [pΦ] といったバリエーションや首里方言 (『沖縄語辞典』) などにみられるような単語による変異などがあって単純にいかない部分がある。その点、k の摩擦音化ははっきりしている。

(10) 「船」の沖永良部方言の語形 [h i n i] は、沖縄北部の国頭村宇嘉方言の [h i N]、大宜味村大宜味方言の [h i n n i] と同系である。語頭における p u > Φ u > h u の変化は、語頭がフではじまるおおくの単語でおこっている現象であるが、*p u > h i の変化が一般的にみられるわけではなく、この単語だけにみられる個別的变化である。

この変化はどのようにしておこったのだろう。*p u n e > h i n i の変化をとく鍵が栗国島方言の [q q i] 「船」で、/*p u n e/ が /h i n i/ に変化する途中の語形であろうと推測される。まず、語頭の音節が無声化し、その影響で後続の子音 [n] も無声化する。これはつよい呼気による進行同化

であろう。その後、第2音節目の鼻音の影響で先行する母音が鼻母音化し、つぎに、その第1音節全体が鼻音化して母音〔u〕がなくなるが、そのちに、末尾の母音〔i〕の影響で第1音節目が口蓋音化し、さらにのちに母音〔i〕があらわれ、鼻音化がなくなって〔hini〕の変化が完成すると推定される。大宜味村大宜味方言の〔hinni〕や国頭村字嘉の〔hiN〕はその変化の最終段階で生じたバリエーションであろう。

せま母音化や／k／の／h／への変化、／p／音の保存といった体系的な変化だけでなく、このような、個別的で、稀にしかみられない音韻変化までが沖永良部島と沖縄北部で共通にみられるということは、この地域のつながりのふかさを感じさせる。

$$h u \eta i \text{ — } \eta \eta i \text{ — } h i \eta i \quad \left\langle \begin{array}{l} h i n n i \\ h i n i \text{ — } h i N \end{array} \right.$$

注) 類似の変化が伊平屋島方言や伊是名島方言にもみられる。

雲 〔m₀u〕、ここ 〔m₀a〕 (伊平屋村我喜屋)

(11) 以上みてきたように、発音上の特徴から奄美沖縄方言群を下位区分すると、奄美大島・徳之島の諸方言と、沖永良部・与論・沖縄北部の諸方言とのあいだにふとい境界線をひくことができる。沖縄北部諸方言と沖縄中南部諸方言のあいだの境界線は、徳之島と沖永良部島のあいだの境界線ほどふとく、明確ではないが、沖縄本島の諸方言を南北ふたつの方言に区分することができる。特筆すべきこととして、沖永良部方言が与論方言よりも沖縄北部諸方言、とくに塩屋湾以北の地域の諸方言との類似点がおおいことをあげることができるだろう。

奄美沖縄方言群の下位方言の区画についてみてきたが、2区分説は、いまひとつ説得力に欠け、これまで検討してきたことをみるかぎりでは3区分説の方が分がいいようである。

注) しかし、奄美沖縄方言群を、奄美方言と沖縄方言のようにふたつにわけると発音上の特徴がないわけではない。奄美大島から与論までの奄美諸島の方言では、「繩」を／no:／、「川」を／ko:／と発音するのに対して、沖縄諸島の方言では、

／na:／／ka:／と発音していて、対立している。／-awa／が融合して／-o:／となるか、半母音／w／が脱落して／-a:／となるかという発音上のちがいが奄美方言と沖縄方言とにある。この現象は、さきにみた母音体系、カ行子音、ハ行子音の例に比べると、特定の条件に制限された個別的な現象に属すが、奄美方言と沖縄方言のふたつに区分する材料のひとつである。

しかしあとでのべるように、このちがいは1609年の島津侵略以降生じたもので、分類に際しては、より体系的で、よりふるい遺伝的形質を優先させるべきである。

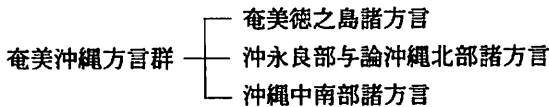
【表12】

	皮	繩	粟
名瀬市伊津部	k'o	no	o
瀬戸内町諸鈍	k'o:	no:	o:
徳之島町井之川	k'o:	no:	o:
伊仙町犬田布	k'o:	no:	o:
喜界町中里	ho:	no:	o:
和泊町和泊	ho:	no:	o:
知名町知名	ho:	no:	o:
与論町城	ho:	no:	o:
国頭村辺野喜	ha:	na:	a:
大宜味村大宜味	ha:	na:	a:
今帰仁村謝名	ha:	na:	a:
名護市久志	ha:	na:	a:
恩納村恩納	ha:	na:	a:
那覇市首里当蔵	ka:	na:	a:

以上、音韻、文法の観点から奄美沖縄方言群をいかに下位区分するかみてきたが、つぎのようにまとめることができそうである。

- (1) 奄美大島、徳之島の諸方言をひとつのグループにして、沖永良部島とのあいだにふとい境界線をひくことができる。

- (2) 沖縄北部諸方言と沖縄中南部諸方言の境界は、徳之島と沖永良部島との境界線に比較して明確な境界線ではない。
- (3) 塩屋湾を境にして、それ以北の沖縄北部諸方言と沖永良部、与論の方言とのあいだにおおくの類似点がみられる。
- (4) 与論方言よりも、沖永良部方言の方が沖縄北部方言にちかい。



7. 蛇 足

(16) それでは、この方言区画は何を意味するのだろうか。この境界線をひいたのは何だろう。琉球列島のばあい、海という地理学的な障壁が存在しているのはまちがいないが、どうして沖永良部島と徳之島のあいだにおおきな境界線があるのだろうか。そして、この境界線はいつごろ発生したのだろうか。

たとえば、 $/-awa/$ が $/-o:/$ と $/-a:/$ にわかれるようになったのは、すなわち、与論島と沖縄本島のあいだに方言差がうまれたのは、ふたつの地域のあいだに人々の交流の質や量に何らかの変化が生じた時期、すなわち、薩摩侵略によって奄美諸島が直接支配された1609年以降のことであると推定される。

徳之島と沖永良部島のあいだの境界線はどうだろう。あるいは、沖縄北部と沖縄中南部の境界線、すなわち、東海岸側では石川市石川と金武町屋嘉のあいだに、西海岸側では恩納村恩納と恩納村谷茶のあいだにある境界線はどのような理由があってひかれるようになったのだろうか。

沖縄中南部諸方言と沖縄北部諸方言の境界線は1673年に恩納間切（現在の恩納村）が読谷山間切（現在の読谷村と恩納村の南半分をふくむ）、金武間切（現在の金武町と恩納村の北半分をふくむ）の集落を分立させて新設される以

前の読谷間切と金武間切の境界にほぼ一致する。また、「おもろさうし」の巻17「恩納より上のおもろ御さうし」では、恩納（集落としての恩納）より北の地域をひとまとまりのものとして認識していたようである。

沖縄北部を「国頭」とよんでいるが、一般にいわれていることは、沖縄北部方言圏が三山対立時代の北山の支配圏だったのではないかということである。『角川日本地名大辞典 47 沖縄県』には「国頭」は「沖縄本島北部と周辺離島からなる。三山鼎立時代の北山の地域にほぼ相当する」と記されている。とすれば、沖縄北部諸方言と沖縄中南部諸方言の境界線は、三山鼎立時代にまでさかのぼることになる。

沖永良部島と与論島の沖縄北部地域とのつながりをどう理解すればよいだろう。沖縄タイムス1998年9月21日付の「唐獅子」の先田光演氏の「永良部世の主」に北山と沖永良部島とのつながりについてかかれた文章がとても示唆的である。

伝説ではユヌヌシは琉球北山王の次男であるという。童名を真松千代といい、和泊町内城に城を構えていたと伝えられている。記録はなく、口碑で伝承されてきた。今帰仁村歴史資料館には、沖縄北部から奄美大島南部まで囲った「今帰仁文化圏」を想定したパネルが掲示されていて、「シニグ文化圏」とも重なっている。シニグはエラブが北限であると考えられるが、ユヌヌシの時代にもあったという伝承がある。

さきののべた方言の区画は、この伝承にあるような歴史的な関係を何らかの程度に反映しているのだろうか。もし、そうだとすると、与論島と沖縄本島のあいだの境界線よりもふるい時代の政治的な区分を反映していることになる。

方言区画と関連して興味深いのは、民俗学的にも、あるいは、音楽、芸能論的にも沖永良部島と徳之島のあいだに境界線があることである。たとえば、先に引用した先田1998の文章にもあるように、沖縄北部地域から沖永良部島にかけてシヌグ・ウンジャミとよばれる民俗行事があるが、徳之島以北にはそれがみられない。また、奄美大島、徳之島には「八月踊り」とよばれる、よく似た

行事があるが、沖永良部島以南にはみられない。

久保けんお1960『南日本民謡曲集』によると、音楽論的にも沖永良部島と徳之島のあいだに境界線がひけるようである。

奄美の民謡は北部系と南部系に分けて考えねばならぬ。徳之島・大島本島・喜界島を北部とし、沖永良部島・与論島を南部とする。北部と南部は旋法もちがうし、蛇皮線の奏法も異なる。

日本の民族旋法として陽旋・陰旋・琉旋の三つがあり、陽旋はレ陽旋を中心（ソ陽旋が基礎）とする巡回旋法、陰旋はミ陰旋を中心とする転位旋法、琉旋はド琉旋を中心（ファ琉旋が基礎）とする転位旋法であるという事が分かりました。そして琉旋法は正確に沖えらぶ島までで、徳之島以北にはない。

方言の境界線と音楽・芸能・民俗論上の境界線が一致していることの因果関係を方言研究の側からも実証的につきとめなければならないが、残念ながら、方言研究はまだこの課題に明確な解答をあたえるほどの蓄積をしていない。もし、沖永良部与論沖繩北部諸方言の方言区画が三山鼎立時代以前の社会・文化的な地域区分に一致するとするなら、考古学、歴史学、民俗学、社会人類学、芸能論、音楽論などの成果にまなびながら、方言区画の意味するものが何なのかを考えていかなければならない。

【参考文献】

安里進1990『考古学からみた琉球史 上』『考古学からみた琉球史 下』

(ひるぎ社)

飯豊毅一他編1984『講座方言学10-奄美沖繩地方の方言-』（国書刊行会）

上村幸雄1992「琉球列島の言語(総説)」(『言語学大辞典下2巻』三省堂書店)

上村幸雄1972「琉球方言入門」(『言語生活』三省堂書店)

沖繩言語研究センター1990『奄美諸島方言の言語地理学的研究』

沖繩国際大学高橋俊三ゼミ1984『沖繩方言研究 第6号-沖永良部方言調査報告』

- 沖縄国際大学高橋俊三ゼミ1984『沖縄方言研究 第6号—沖永良部方言調査報告・資料編』
- 奥田透・真田真治1983「沖永良部島における口蓋音化の分布域」『琉球の方言 8』法政大学沖縄文化研究所
- 甲東哲1987『島のことば』
- 久保けんお1960『南日本民謡曲集』（音楽之友社）
- 仲宗根政善1961「琉球方言概説」（『方言学講座第4巻』、東京堂出版）
- 仲宗根政善1983『沖縄今帰仁方言辞典』（角川書店）
- 中本正智1976『琉球方言音韻の研究』（法政大学出版会）
- 中本正智1981『図説琉球語辞典』（金鶏社）
- 中本正智1983『琉球語彙史の研究』（三一書房）
- 中本正智1984「琉球方言の下位区分」（『講座方言学10—奄美沖縄地方の方言—』（国書刊行会）
- 中本正智1990『日本列島言語史の研究』（大修館書店）
- 平山輝男編1986『奄美方言基礎語彙の研究』（角川書店）
- 外間守善1981『日本語の世界9』（平凡社）
- 琉球方言研究クラブ1996「琉大方言第11号—沖永良部島正名方言の音韻体系」
- 琉球方言研究クラブ1994「琉大方言第9号—金武方言の音韻体系」
- 琉球方言研究クラブ1993「琉大方言第8号—久志方言の音韻体系」
- 琉球方言研究クラブ1992「琉大方言第7号—津波方言の音韻体系」
- 琉球方言研究クラブ1991「琉大方言第6号—辺野喜方言の音韻体系」